

## 総合討論 1

富山 花田さんのコメントを強引に要点だけ述べさせていただければ、それは、歴史性というものをどう入れるのか、そしてナショナルな問題というよりもある意味で世界システムの段階性という問題性の中で歴史性をどうみていくのか、という論点が出されていると思います。

小熊 もちろん、歴史性の細かい論点からいえば二人の間にはいろいろな違いはあると思います。新渡戸の生きた時代というのは富国強兵の時代であり、矢内原の最盛期というのは大正デモクラシーの時代ですから、時代的反映は当然あります。単純に、新渡戸の時代の方がより昔であり、強権的開発という概念に対して肯定的であり、より時代の進んだ矢内原の方がそういう帝国主義的な要素に対して否定的になって、より自由主義的な要素を打ち出す、という側面もあるでしょう。それは本当に時代的な問題であり、それ以上のことは申し上げられないんですが。

日本の政策遂行との関連性ということですが、矢内原はまずほとんどない、と言っていいでしょう。批判の役割であったと言っていい。新渡戸に関しては、台湾の初期に糖業の改良意見書を出したりし、かなり

青写真をひいたといわれています。日本史の中でこのことはかなり議論があり、どのくらい反映したのかはわかっていません。少なくとも二人の同化主義批判は日本政府によって採用されなかった、ということは確かです。

花田 それでは、この二人を代表的に対比させて取り上げることの意義はどのあたりにあるのでしょうか。

小熊 開発と植民学の接点として見やすい、ということです。植民政策学者としてみれば確かに他の人もいろいろいますが、その意味で一番見やすいのはこの二人でしょう。

そしてもう一つ、政治・文化と経済は当時一体であったはずではないか、という点に関して。これは、たとえばある程度人間が経済人として仮定されるならたしかにそうなんです、ある意味で現地ではそう単純ではなく、たとえば共有財産制をとっている土地ですとか、奴隷制をとっている土地を、個人所有に切り換えたり奴隷制をやめさせたりすると一時的に経済的な生産性が下がることもままあります。それによって植民地としてのもうけが下がるという場合に、どちらをとるかという問題が出てくる。文化という問題を組み入れると両立し

ないケースが出てくる、ということです。

さてもう一つは、なぜフランスが同化政策に傾き、イギリス・オランダが間接統治に傾いたかという点ですが、これも非常に多くの要因があると思います。私が一つだけ指摘できるとすれば、法体系の違いがあると思います。というのも、フランスは大陸法で、まず人権宣言を打ち出し、それに基づいて普遍的な法律としてつくられているんですが、イギリスは慣習法体系ですから、基本的に国外に持ち出せない法律なわけです。

冨山 崎山さんはいかがですか。

崎山 まず、歴史的な契機の差はさみの問題について。

おっしゃるとおり、ザスーリッチなどを持ち出すと19世紀の話なのかということになってくるんですが、後で自生的・自助的發展という形をたてたこと、そしてニカラグアの問題を入れたことで今世紀、とりわけ第二次大戦後と問題設定をするのが一番妥当であると考えています。ただ、プレビッシュから始まったわけではない、というのが私の考えでして、近代化にしても、固有の發展という形で括ることができるかどうかということ自体が問題なのですが、ラテンアメリカにおける源流というのはおそらく1920年代前後とするのが妥当であると思います。

それから、従属論的にきこえてしまった

というのはニカラグアを取りあげたこととも関係があるんですが、ニカラグアはおそらく従属論、新従属派の中での政策を出しながら、それを超えようとして失敗したという意味で「特権的」な事例であったと考えています。ですからザスーリッチの場合にも端的に出てくる、ナショナルな枠で囲われてしまうような地理的・政治的・経済的カテゴリーといったことではなく、他へ波及する形での發展というものを、ニカラグア政府はおそらく考えていただろうと思います。そのことがこの場合、異質とされたミスキートやスモヤラマの人々にとってどうであったのか、ということはまた別の問題ですが、従属論の今の時点での再評価へ傾いてしまうというのではなく、そのことの失敗を実践的にも総括しうる問題として出せるのではないかと。もちろんそういった意味においては、あまり構図的に中心／周辺の二極分化にあてはめること自体、私はいいとは思っていないんです。そのことは現実に、貧困という問題をめぐって存在している権力関係の一つであるとは思っていますが、その図式にあてはめて何かオルタナティブな可能性が出てくるとは、私自身はあまり思っていないんです。ここで従属論の立場を打ち出そうとしたわけではなく、その構図自体をこの場合には対象にしていきたいと思っています。

それから、実際には今日の発表では図式

的に二極分化していくように言ってしまったところがありますが、もっと媒介項は多数あるわけです。実践としての発展を構想することと固有性として語られる文化との間がそのまま直接に結びついているといったなら、おそらく間違いであろうと思います。さっき花田さんのおっしゃった NICS の問題などとも関わってくると思いますが、中岡哲郎さんと塩沢由典さんが『技術発展の国際比較』という本を筑摩書房からだしています。その中で塩沢さんは、「社会の技術的能力」という言い方をとって、社会的な形でブルジョワらしいブルジョワ、プロレタリアートらしいプロレタリアートを生み出していく様々な形での、技術を使いこなす能力なり教育なり知識というものと、その再生産の問題について議論しています。たとえば農業中心の社会でも、農業に関する社会的構造と、農業にまつわる技術的な問題というのが相互に関連しながらしかし一体ではないというところに、固有性、多様性の問題が出てくると思いますし、逆に固有とよぶか多様とよぶかは理論的というよりも戦略の問題になってしまうと思うんですが、生産力を上げていくというところから逆算していった場合には、固有という言い方ではなく、多様の教育対象といえますか、意図的な可変の問題として能力なり教育なりがたてられていくのではないかと考えています。

栗本 「自助的・自生的発展が失敗した」ということですが、誰がどのように失敗したのでしょうか。たとえばアメリカの人がニカラグアの政策は失敗したという場合と、ニカラグア政府の役人自身が失敗したというのでは違うと思うわけです。特に、自助的・自生的発展、あるいは自立というものをめざした場合、究極の目的が従属からの解放ということであれば、それがある程度達成されていけば、GNPなどが上がらず発展が停滞していても、さらにマイナスでもいいという考え方もあり得るのではないかと。そういう問題がニカラグア内部でどのように出されたのでしょうか。

もう一つは、文化の問題が発展の阻害要因として語られるということですが、その言説そのものがオリエンタリズムなのではないのでしょうか。たとえばインドのカースト制やイスラムの断食が発展を阻害したとか、そういうレベルの話でしょう。また、それはある意味で本当の問題を隠蔽している効果もあるのではないのでしょうか。

崎山 一点目について。「失敗」ということは、アメリカもいいましたしニカラグアも文書で出しています、それ以外に私自身も失敗であると思っています。この「私自身が」というのは、私がやっていく上で抜かせない、と私は考えています。失敗というのは、アメリカの意見では、政権が維持できず選挙に負けたということです。前

政権のサンディニスタたちが出したのはその裏返しです。いろいろ問題があつて失敗したが、7割はアメリカの帝国主義のせい、3割は自分たちが腐敗やあやまちのせいである、というを出しています。また、サンディニスタたちの出した文書は、先ほど言及したように「機能主義的総括」でありまして、それはマイナスの意味で使っておきたいと思つているんです。3割は腐敗などがあったとはいいいながらも、結局、革命なり発展なりの正当性というのはまったく疑われていないという点において、この失敗というのは政治的な総括としての失敗という結論だけではなくて、二重、三重に失敗だったのではなからうか、と考えているからです。

次に、文化の問題について。重大な「内的異質性」を見つけていくこと自体も、そしてまた、発展阻害の原因として措定していくこと自体も、オリエンタリズムの問題構成から逃れられない形で出されていると思います。ループと書きましたが、なぜ発展ということの中で、経済的な問題が常に「文化」に立ち戻るのがか。その場合の「文化」とは、矛盾なりなんなりを生きているありのままのものとしてではなくて、ある時点で一旦それを切り離し、分類し、そして分析する対象とされたものでしかないわけですが、なぜ「発展」がそこに立ち戻っていくのか。その問題が、おそらく「発展」

と「文化」、もしくは「発展のオリエンタリズム」、「発展」と「オリエンタリズム」というものを考えていく上での、差し挟まれる力として考えられなくてはならないのではないか、と思います。

つまり、文化というものを原因として設定していると言いたいのではなく、原因として設定している、ということ自体を対象化したいのです。その上で、文化は「阻害する原因」としてマイナスの意味で語られるばかりではなく、よりそれを生かしていくものとしてのプラスの原因として語られる場合もあり得る。そういった意味では、それがプラスであれマイナスであれ、常にそこへと問題が立ち戻っていかざるを得ないような問題として、文化というものが考えられていると言いたかったわけです。

池田 ニカラグアははたして内側から崩れたのだろうか。やはりアメリカの圧倒的な中米戦略の成功だと思われるのですが。アメリカ側の開発と包囲、私にとってはそういう意味で軍事と開発は一体であると思います。それらが総合的にある一つの結果を得たとは考えられないでしょうか。

例えば、選挙に負けたというのがニカラグアにとっての敗北であるといえるのだろうか。サンディニスタがむしろ公明正大な選挙に訴え、自ら第一党の席を譲るとするのは政治・文化の観点からするとユニークであるといえるのではないか。また識字率

の維持や乳幼児死亡率の上昇を防いだというような、ニカラグア革命の残した評価すべきポイントはたくさんあるのではないかと。

また、ミスキート、スモ、ラマという話があったが、彼らはやはり圧倒的なマイノリティである。CIAの戦略というのは、中央に対してもともと歴史的に敵対的な民族というところから食い込んでいくというものである。CIAはサンディニスタが少数民族を抑圧している、という言説をばらまいたということもある。こういう点を見ていくと、内側からの失敗といえるのだろうか。

ところで、内発的発展論についてであるが、内発的発展というのはナイーヴなのではなく、形容矛盾であると思う。この形容矛盾が当たり前のようにみえるのが我々自身のオリエンタリズムである。富山さんが計量化された時点で固有がなくなるとおっしゃったが、エスノグラフィとして書かれた時点でやはり固有性が固まることもあり得る。要するに、誰が継承するかということも含めて言わなくてはならない。

崎山 ミスキートやスモやラマは確かに圧倒的なマイノリティですが、選挙の投票率は非常に地域的に偏りがあって、サンディニスタの出しているような線では同調することができなかったのではないのでしょうか。その上で言いたいことというのは、サンディニスタのやろうとした発展の方法は、農

業を中心とした土地改革のであり、その姿勢は私も非常にいいのではないかと今でも思っています。

しかし、工業と農業のリンケージが壊れてしまっている。工業の部分ではまず全国的なエネルギーのインフラストラクチャーをつくるために地熱発電所を作ろうとして、予算不足で中断した。観光資源としてカジノを国家予算で作ったが、これも失敗しています。工業の方では重工業に偏った発展になっています。その一方で、農業の方ではストライキが相次いでいるわけです。生産インセンティブをどんどん導入し、その中でイデオロギーを選択するなら「給料が上がるよ、もっと生活がよくなるよ」と宣伝していたとき、アメリカ帝国主義の経済封鎖などによって生活がどんどん苦しくなり、ストライキが起こってしまった。それをうまく回避するために、発展の中でのナショナルな語りとして、自立ということをしていってほしいんですが、それが失敗したという点において、まさしく失敗であったと思います。もちろん一番の原因としては、アメリカをはじめとした経済封鎖と軍事的侵攻で、LICの威力はありますが、同時にその中で行われていたことに対して無視や免罪はできないのではないかと。逆に無視や免罪をするということは、大きな落とし穴に落ちることではないかと考えています。

次に、内発的発展論というのは確かに形容矛盾であると思います。「内発的発展論」という考え自体が、大きなアポリアを抱えているように思います。

富山 花田さんのコメントに対する崎山さんのリアクションに関して、崎山さんは遠慮してリアクションしているのでは、という印象を持っています。段階性の問題、あるいは資本蓄積のある種の形態の問題で詰めることのできる部分と、最後に花田さんはハビタスの話をされたこととは同次元で考えていいのかという問題です。花田さんとは少し違うハビタスの入れ方を、崎山氏はしようとしているのではないかと私は思います。そうしたときに、統一的な時間性というものを崩すような議論をたてざるを得なかった。つまり、崎山さんは、そこに

何かしら内発性、独自性という問題をたてようとしている。これは戦略的には非常に面白いと思います。そうしない限り確かに池田さんのおっしゃるように形容矛盾、論理矛盾であるということはわかるのだけでも、それでもやはり両方の語りが融合してしまうのはなぜか、という問題は残るわけです。にもかかわらず、たとえば発展段階の話をする、融合の話が便宜的に無に帰される議論にしかない。文化の話も最終的に、独自性をいいながらそれで解けないところに経済をもってきて事なきを得てしまう。やはりどちらでもない話が現実なわけですね。そうであるが故に融合してしまう。そのどちらでもない話をどう解くか、という設定がまさしく必要なわけです。